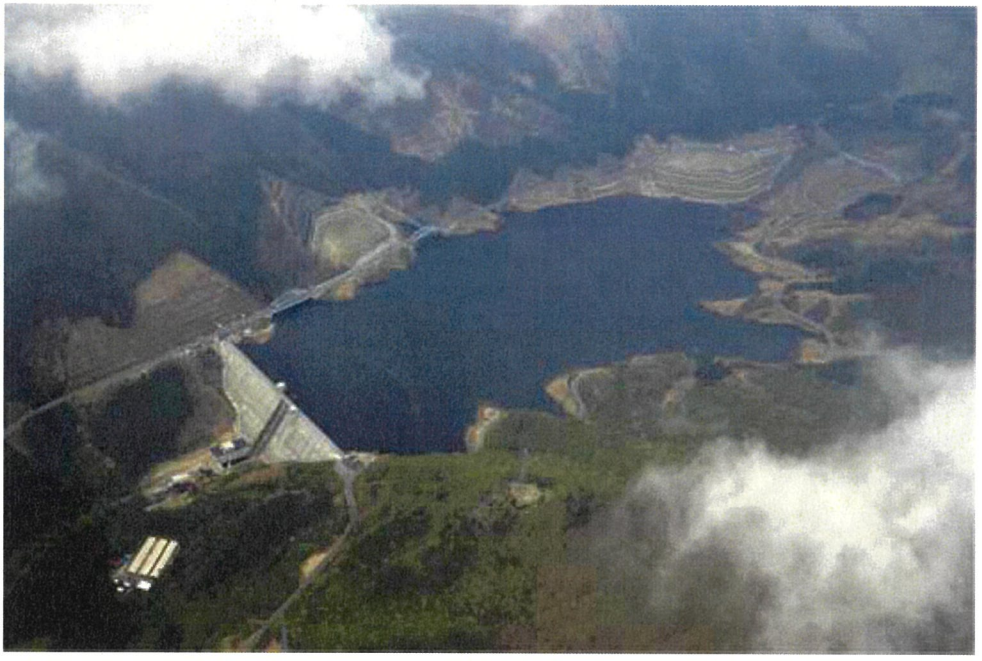
地域とともに歩む鷹生ダム（後編）

鷹生ダム建設事業を振り返る

後編では、平成 11 年 4 月から完成までを振り返ります。
前編は、5 月号（http://www.pref.iwate.jp/~hp0600/npo/index.htm）をご覧ください。



鷹生ダム全景

自然との共生・地域と歩むダム造り

本体工事が順調に進行していた平成 11 年 4 月、鷹生ダム建設事務所に、所長として赴任した村井研二（むらい　けんじ）は、ある問題にぶつかっていた。それはコンクリート運搬設備の形式についてだった。通常ダム建設ではケーブルクレーンを採用しダムコンクリートの打設を行うが鷹生ダム周辺は県立自然公園に指定されており美しい自然環境が広がっていたこと、また、ダム現場周辺にイヌワシの生息が確認されイヌワシの飛翔に影響がある恐れが考えられた。

この問題は、施工会社である清水建設からのある提案で解決の方向に動き出した。それは新たなコンクリート運搬設備「槌型クレーン（ライジングタワー）」の開発である。このクレーンは、ビルを建設するときに用いるタワークレーンと水平移動の機能を持つテルハクレーンを足したイメージで、横から見ると「T」の形に見えることから槌型クレーンと呼んでいた。

このクレーン形式は世界に類を見ないもので導入にあたっては幾多の協議を重ねた。一度は不採用となったものの、村井をはじめとする建設事務所職員及び施工会社の一体となった技術開発により採用が決定した。

このクレーンの導入により山肌を削ることなくコンクリート打設ができること、イヌワシの飛翔に限りなく影響を与えなくなることとなった。

この他にも周辺環境及びイヌワシの生息に配慮し、原石山発破の期間制限、仮設備の騒音対策、仮設備の塗装色（緑色）の統一など出来る限りの対策を行った。

工事関係者は 1000 人以上。工事中は無事故でした。

槌型クレーン（ライジングタワー）

次に村井は振興局・市役所・地域住民による「ダムを核とした地域づくり」に取り組んだ。当時ではまだ珍しかったワークショップを開催し、モデルコミュニティ計画の策定とその実践に取り組んだ。

貯水池上流の建設発生土受入地法面への植栽は地元住民をはじめ約 400 人が参加した。

また、日頃市地区公民館創設 50 周年記念事業とタイアップして日頃市町の「宝」を紹介する冊子の作成や場所を案内する案内板等を設置した。住民が主体となって行う地域づくりが見事に成功した。

村井は、槌型クレーンと住民主体となった地域づくりという大きな産物を残し平成 14 年 3 月大船渡市を去った。

日頃市「お宝マップ」

地域のお宝「長安寺」と「小通鹿踊り」

地域住民が参加した植樹会

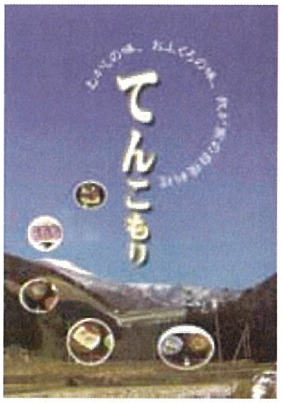
食テーマに地域づくりを継承

平成14年4月、菅原佐（すがわら　たすく）は、鷹生ダム建設事務所に着任した。菅原は、前任所長の村井が残していった地域づくりの締めくくりとなる「食」をテーマとした地域づくり活動を行うことにした。

食は一部の人たちが参加するだけでなく、生活の主役である女性が参加できることもあり地区全体で取り組める絶好のテーマであった。料理作りを教えてくださった年配女性からは、「初めてこのような地域の行事に参加し感激した」との感想があった。埋もれていた人材の掘り起こしに成功した瞬間だった。この「食」をテーマにした取り組みは、後に地域住民を中心とした組織に取りまとめられ、冊子として発行されている。

菅原は、1年間の在籍ではあったが地域づくりの継承役を果たし平成15年3月大船渡市を後にした。

レシピ作りに参加した皆様



レシピ集「てんこもり」

総貯水容量968万㎥・試験湛水を開始

事業スタートから１５年目を迎えた平成15年4月、小松勝治は所長として鷹生ダム建設事務所に赴任した。本体工事は最盛期を迎え順調に工事は進んでいる。事業完了年度がすこしづつ近づいてきていた。「本体工事は順調だが、水が溜まるか・・・。」一抹の不安があった。

平成16年6月18日、本体コンクリートの最終打設を行った。待ち望んでいた最終打設には、地域住民をはじめ多くの人々が駆け付け雄雄しく迫力に満ちたダム堤体の概成を祝った。

本体コンクリート最終打設式

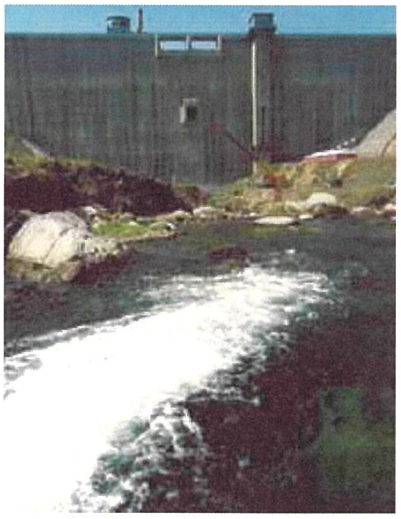
事業完了まであともう一歩というところまで来た。あとは、仮設備などの撤去、周辺環境整備、そして試験湛水を終了すれば事業完了となる。「もうひと踏ん張り」小松は決意を新たにした。

平成 17 年 5 月 11 日、試験湛水を開始した。総貯水容量 968 万ｍ３のダムに満々と水をたたえ、ダムの安全確認を行う試験である。試験湛水用ゲートが下ろされ、下流河川に必要な水量を放流しながらの試験湛水。早く貯まって欲しい。そう願うしかなかった。

しかし、小松の心とは裏腹に晴天ばかりが続く。「少しの雨でもいい。降ってくれないか・・・。」日に日にあせりを感じてきた。少しでも水を貯めようと細かい放流調整を行ったりもした。しかし計画に対して一向に追いつかない状況が続いた。最終的には国に認可された試験湛水計画の変更も行った。

小さな努力が実ったのか、徐々に計画に追いついてきた。「この調子なら平成 18 年度中に最高水位に到達できる。」小松は確信した。

小松は、本体工事の概成を見届け、事業完了年度内の最高水位到達を確実なものとして平成 18 年 3 月、充実した大船渡市での３年間の勤務を終えた。



「最終段階」の節目祝う

鷹生ダムで試験たん水開始

大船渡

湛水開始

H17.10　ヤマメの稚魚を放流　　H18.6　あゆを放流

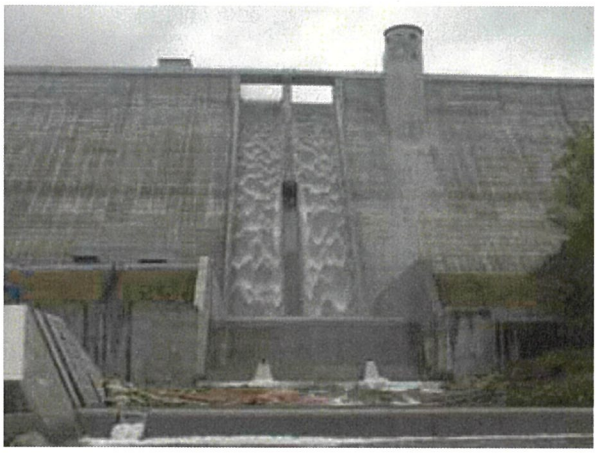
最高水位到達に歓声・鷹生ダム完成

平成18年4月、佐藤憲史（さとう　けんし）は鷹生ダム建設事務所に赴任した。所長としては9代目となっていた。佐藤としては、事業最終年度ということ、試験湛水の真っ最中ということもあり、ゆったりしている時間は無かった。ダムの最高水位まで水位を上昇させ、安全を確認した上で徐々に水位を降下させていく大きな仕事が待っていた。

平成18年5月10日午前10時3分、鷹生ダムはダムの最高水位に到達した。数日前から河川からの流入量をみて、何度もシミュレーションを行い、到達時間は午前10時に設定していた。その差3分。奇跡だった。佐藤をはじめ建設事務所員全員が喜んだ。

最高水位の到達は、100年に1度の確率でしか見られない光景とあって地元からたくさんの見学者が訪れた。「わあー、大きいね！」「すごいね！」来る人一人ひとりが普段目にすることの出来ない雄大な光景に驚いていた。中には湖面を見つめて涙を流しているお年寄りもいたという。

その後24時間水位を保持したまま安全確認の作業を行った。「異常なし。」鷹生ダムが効果を発揮した瞬間だった。



最高水位（サーチャージ水位）のダム湖

見学者は2,006人訪れました。

鷹生ダム永遠なれ

平成 18 年 10 月 26 日、鷹生ダム竣工式が国土交通大臣、岩手県知事、岩手県議会議長をはじめ出席し挙行された。建設採択から 18 年。長い道のりだった。鷹生ダム建設事業に携わった歴代の職員は計６４人。この職員数を見ても長い道のりであることが伺える。その晩は歴代職員の苦労を称え、また、竣工式を見届けることの出来たことを祝った。同時にこのメンバーとの別れも近づきつつあった。

記念碑除幕

テープカット

平成 19 年 3 月、鷹生ダム建設事務所内は書類の山となっていた。事務所閉所に伴う書類整理を行っていた。「長期間の事業だから書類がいっぱいだね」通常事務と同時に行う書類整理。これが終われば一切が終了する。なんとなく寂しい雰囲気になった。

建設事業が終わっても、鷹生ダムと建設事業中に培った地域との絆は永遠に残る。これまでより更に日頃市地区の地域づくりが進んでいけばいいとメンバーみんなが思っている。

平成 19 年 3 月 30 日、閉所式が開催され大船渡地方振興局長廣田淳と佐藤憲史所長の手によって事務所入り口の看板が取り外された。１８年間に及ぶダム建設事業を展開した職場は、幾多の困難を乗り越えて鷹生ダムを誕生させる原動力となった。

鷹生ダムは、公募で決定したダム湖名「五葉湖」の愛称を携えながら、地域のシンボルである五葉山とともに大船渡地域の多くの人々の生活を見守っている。

看板取り外し

関係者集合写真

歴代所長と鷹生ダム完成見学

旅立ち

鷹生ダム建設事務所閉所に伴い、職員全員が次の勤務地へ赴任した。道路事業・河川事業・砂防事業・下水道事業・ダム事業・漁港事業とさまざまな分野へ旅立っていった。別れても個々が考えていることはひとつ。「県民の幸せ」である。

「またいつか一緒に仕事をしよう」職員一人一人がこの言葉をかけて旅立った。（完）

編集：前鷹生ダム建設事務所（現釜石地方振興局水産部）技師　藤原　慎